

# 小丸川発電所

## 揚水用電力不足恐れ

### ピーク時 九州内全原発停止で

今年7月に全面稼働した九州電力の揚水発電施設・小丸川発電所(木城町)が、今冬、冬の電力需要ピーク時にフル稼働できない可能性が出てきた。月内に九州の全原発が停止することなどから、水のくみ上げに必要な電力の確保が懸念されるため、必要電力には夜間の余剰電力が充てられており、九電は「夜間を含め、節電協力をお願いします、発電量も19万6千キロワット時



今冬のフル稼働が懸念されている小丸川発電所の上部ダム。6月、木城町石河内

同発電所は上部ダムにくみ上げた水を下部ダムへ流下させて発電。最大出力は九州最大の120万キロワットで、一般家庭40万世帯分に相当する。ただ、水のくみ上げには最大出力以上の電力が必要で、通常は需要の少ない夜間に原発や石炭火力発電で余った電力を活用している。蓄えることが難しい電気の性質上、揚水発電は「大電力をためられる蓄電池」としての役割を担い、九電は同発電所を需要ピーク時やトラブル時などの緊急対応用電源として運用。電力不足が懸念された今年7、8月はフル稼働し、発電量も19万6千キロワット時

(前年同期比80・7%増)で前年の約2倍に達した。

しかし、玄海原発1号機は12月1日に定期検査入り。4号機も月内に定期検査に入り、九州内の原発全6基が停止するため来年1月の供給力(1469万キロワット)は当初計画より2万72万キロワット減少し、供給余力を示す予備率は0・8%と逼迫(ひっばく)。さらに厳冬だった昨冬並みの需要が発生した場合、揚水や火力をフル稼働しても予備率はマイナス2・2%まで落ち込む見通し。また冬場は冷え込む夜間の需要が下がり、余剰電力が少なくなる恐れがあるという。

九電宮崎支社は「原発3基

が稼働していた夏場に比べ、今冬は上部ダムを満杯にするだけの電力が確保できないことも考えられる」と懸念。1日から来年3月30日まで家庭や企業に節電を要請しており、特に供給力が落ち込む26日～2月3日は数値目標として「最大電力の5%以上」の節電を掲げている。